

報恩抄

御文①

御書新版……218頁 12行目〜16行目
御書全集……297頁 13行目〜17行目

「いわんや滅度して後をや」と申して、未来の世にはまたこの大難よりもすぐれておそろしき大難あるべしとてかかれて候。仏だにも忍びがたかりける大難をば、凡夫はいかでか忍ぶべき。いおうや、在世より大いなる大難にてあるべかんなり。いかなる大難か、提婆が長三丈広さ一丈六尺の大石、阿闍世王の醉象にはすぐべきとおもえども、彼にも過ぐるべく候なれば、小失なくとも大難に度々値う人をこそ滅後の法華經の行者とはしり候わめ。

現代語訳①

經文には「まして仏が亡くなった後にはなおさらである」とあり、釈尊が亡くなった後の未来の時代には、またこの大難にもまさっていつそう恐ろしい大難があると説かれている。仏でも耐えがたい大難なのに、凡夫はどうして耐えることができるのか。まして仏が存命中よりも激しい大難であるというのである。「どのような大難が、提婆達多が仏を殺そうとして投げ落とした長さ三丈（約九メートル）、幅一丈六尺（約四・八五メートル）の大石や、阿闍世王が仏に向かって放った酔った象を超えるだろうか」とは思うが、それ以上であるというのであるから、わずかの過失もないのに大難にたびたびあう人こそが釈尊の亡くなった後の法華經の行者であると分かるのである。

御文②

御書新版……232頁 14行目〜233頁 4行目
御書全集……308頁 7行目〜12行目

慈覚・智証の二人は、言は伝教大師の御弟子
とは名のらせ給えども、心は御弟子にあらず。
その故は、この書に云わく「謹んで依憑集一卷
を著して同我の後哲に贈る」等云々。「同我」の
二字は、真言宗は天台宗に劣るとならいてこそ、
同我にてはあるべけれ。我と申し下さるる宣旨
に云わく「専ら先師の義に違いて偏執の心を成
す」等云々。また云わく「およそ、その師資の道、
一つを闕いても不可なり」等云々。この宣旨の
ごとくならば、慈覚・智証こそ専ら先師にそむ
く人にては候え。
こうせめ候もおそれにては候えども、これを
せめずば大日経・法華経の勝劣やぶれなんと存
じて、いのちをまよひに懸けてせめ候なり。

現代語訳②

慈覚・智証の二人は、口では伝教大師の弟子と名乗られているけれども、心は弟子ではない。その理由は、この書に「謹んで依憑集一卷を著して、私と心を同じくする後世の哲人に贈る」とあるからである。「私と心を同じくする」という言葉は、真言宗は天台宗に劣ると学んではじめて、「私と心を同じくする」と言えるのである。

自分の方からお願いし出していただいた宣旨には「先師の教えに背いてどちらか一方に執着する心を起こしてばかりいる」とある。また「そもそも師匠から弟子へと相承する修行は（止観業と遮那業という）両業のうち一つでも欠けてはならない」とある。この宣旨に従えば、慈覚・智証こそ先師に背いてばかりいる人ということになる。

このように責めることも恐れ多いことであるけれども、これを責めなければ大日経と法華経の勝劣が覆されてしまうと、命を懸けて責めるのである。